

オンライン授業における漢字授業の実践^{*}

－釜山外国語大学の「実用日本漢字」授業を事例に－

趙恩英^{†**}
choeun215@gmail.com

＜目次＞

- | | |
|-------------|-----------------------|
| 1. はじめに | 4. 分析結果と考察 |
| 2. 先行研究 | 4.1 各クラスのアンケートの結果 |
| 3. 研究概要 | 4.2 結果の比較・検討 |
| 3.1 研究対象と方法 | 4.3 授業形態ごとのメリット・デメリット |
| 3.2 授業の様子 | 5. まとめ |

主題語: コロナ禍(Covid-19 Pandemic)、オンライン授業(Online Class)、オンデマンド型オンライン授業(On-demand Type Class)、同時双方向型授業(Face-to-Face Type Class)、漢字学習(Kanji Learning)

1. はじめに

本研究は、釜山外国語大学の日本語創意融合学部で開設された「実用日本漢字」授業のオンライン授業の事例報告である。2019年末に発生した新型コロナウイルス感染症により、これまで経験できなかった教育環境の変化に、大学はICT教育を余儀なくされ、様々なツールを導入することになった。本研究は、2020年後期に開設された「実用日本漢字」の授業方を紹介し、授業に参加した学習者が最終日に作成したアンケートから、オンライン授業の特徴とその改善点を明らかにすることを目的とする。

コロナ禍パンデミックにより、「社会的距離をおく」「社会的距離政策」の拡散で「アンタクト(非対面)化文化」が日常化され、「アンタクト社会」は新しいパラダイムとして登場している。アンタクトは出前アプリケーションで代表される小売り・流通のみならず、遠隔医療、遠隔学習、遠隔勤務など社会全般に拡散されている。今後、ポストコロナ時代は、アンタ

^{*} 이 논문은 2020학년도 부산외국어대학교 학술연구조성비에 의해 연구되었음

^{**} 釜山外国語大学校 日本語創意融合学部 助教授

クト社会がニュー・ノーマルとして位置づけられ、関連技術開発と産業育成を通じた成長モメントの確保が重要な課題として浮上すると予想されている。

特に大学業界の変化はエドテック時代の到来と言えるだろう。コロナ禍による環境の急激な変化に比べ、大学は突然訪れた未来教育の環境に適応できず、既存の教育体系に代替している状況である。現在の授業の形態は非対面教育と呼ばれているが実はオンライン授業(同時間オンライン授業および録画オンライン授業)で実施されている。非対面教育であれ、オンライン授業であれ、重要なのは、これまでの授業方式とはさまざまな面で異なっているため、教える側のみならず、教わる側も混乱している状況である(以下、オンライン授業とオフライン授業に統一)。オンライン授業で授業が普段行われているサイバー大学とオフライン授業で授業が行われてきた大学におけるコロナ禍の対策は非常にそのレベルが違い、授業コンテンツの質の面と授業の提示方法においてサイバー大学が優れている。コロナ禍でオフライン学校におけるオンライン授業の準備に対するストレスは経験していない人には想像できないであろう。コンテンツ製作の知識が不十分なまま同じ授業の動画を何回も撮影したり、デジタルリテラシーの違いにより、学習者が感じる授業の満足度にも差が出ると思われる。

そこで、本研究では、オフライン授業でも学習者の不満や難しさが多く報告される漢字授業について、オンラインで行われた2020年後期の授業を事例として分析する。同じ科目の2クラスの授業に参加した学習者のアンケートを分析することにより、授業形態と活動について学習者の教育形態に対する意識が分かると考えられる。また、学習者の考えているオンライン授業の長所・短所について考察することにする。

2. 先行研究

オンライン授業に関する先行研究は、最近、様々な授業の実践報告や研究でなされている。河野(2020)は、Zoomを用いた日本語会話授業の実践について報告している。「サバイバル日本語」「プレゼンテーション日本語」の受講生を対象に、学期終了前にアンケート調査を行い、その結果を用いて、オンデマンド授業では、繰り返し授業が見られる利点があり、同期型授業では、聞き逃しが起ったり、指示を明確に把握できないことが起りうることを指摘している。しかし、河野(2020)は、日本人教員による会話授業であるため、漢字授業

のような文字教育にも似ている結果が出るか疑問が生じる。

白(2020)は、オンデマンド型と同時双方向型の授業を比較・検討し、各授業における学習者の好みと学習者が感じた授業形式による効果を明らかにしている。オンデマンド型について、初級レベルの学習者は繰り返しの学習ができる点で、中上級の学習者よりその利点を挙げているものの、学習者の興味と集中度、学習効果については同時双方向型を好んでいることを指摘している。また、次の学期で行われた授業の形式について、ある一方の形式を望まず、オンデマンド型と同時双方向型を併用する授業形式を望んでいることを指摘している。白(2020)は、オンデマンド型と同時双方向型授業を比較しているものの、実際に、併用型授業の実践はまだ行われていない。

杉本(2020)は、オンデマンド型オンライン授業について、啓明大学の学生療で実施されている日本語学習寮の学習者を対象にした授業を事例として挙げ、学習者が提出した課題を活用した結果について紹介し、対面授業との比較を通し、非対面授業のメリットとデメリットを述べている。メリットとして、全員の課題が効率よく共有でき、フィードバックを取りこぼさず行え、学習者は自由な時間に学習でき、繰り返し学習することができる、学習者が自分の発音やアクセント、イントネーション、癖などを確認しやすく、最初と最後のスピーチが比べられ、学習者自身の成長が実感できることを挙げている。デメリットとしては、クラスメートと直接交流ができず、対話もできない、スピーチの授業でお互い質問をし合えず、課題が多く、学習者の反応や学習状況がつかみにくいことを挙げている。杉本(2020)は、非対面授業のメリットとデメリットを述べているが、日本語学習療の日本語学習者を対象にしたため、一般化するには無理がある。

以上のように、コロナ禍における授業形態について、オンデマンド型と同時双方向型をそれぞれ実践し、その特徴を明らかにしている論文が多く、今後も類似しているテーマで研究がなされると予想される。

しかし、授業形態ごとの特徴からその学習効果がやや異っていると考えられるが、オフライン授業での結果とオンライン授業での結果を用い、同一の授業活動をする場合、学習者は、その授業と活動について、どう認識しているかについてはまだ明らかになっていない。また、併用型授業の実践も報告されていない。

そこで、本研究では、コロナ禍が起きる直前の2019年後期の「実用日本漢字」授業で実施した二つの活動について、学習者が持っている認識¹⁾を、考察の際に用いる。コロナ禍の

1) 趙(2020)は、「実用日本漢字」授業を事例として、授業で行われた二つの活動についての学習者の認識を明らかにし、学習者の活動(週末にあったことをいくつかの単語で表現する活動と漢字を手書きで書

2020年後期の漢字授業では、オンデマンド型と、オンデマンド型・同時双方向型(以下、併用型と称する)で授業をしたが、授業で実施した活動について、学習者がどう認識しているのかを2019年度の結果と比較する。

この結果により、授業形態という授業の形式の面も重要であるが、当然なことであるが授業内容(運営内容)も看過してはいけなことが分かると予想される。具体的に授業での活動について、一つのクラスでは、オンデマンド型で授業を行い、手書きで漢字を書く行為についての学習者の認識を検討する。もう一つのクラスでは、併用型授業で授業を行い、Zoomでの同時双方向型授業の際、週末にあったことを漢字キーワードで表現する活動をし、その活動についての学習者の認識を検討する。

3. 研究概要

3.1 研究対象と方法

本研究は、釜山外国語大学の日本語創意融合学部の2020年後期、1年生の専攻選択授業の2クラスを対象にする。今学期、「実用日本漢字」は1クラスから8クラスまで開設され、5人の韓国籍教員が授業を担当した。筆者が担当したクラスは5クラスと6クラスである。授業計画の段階ではコロナ禍の状況がやや収まるのではないかと判断し、後期の直前に2クラス全部をオフライン授業で申請したが、他の教員のクラスより受講性の申請が少なかった。その後、全面オンライン授業への変更となり、授業形態をオンラインに変えたら、5クラスは38人が受講し、6クラスは31人が受講することになった。そのうち、アンケートに協力してくれた学習者は、5クラスでは、日本語専攻者が15人、日本語複数専攻者・副専攻者が13人で合計28人であり、一方、6クラスでは、日本語専攻者は14人、日本語複数専攻者・副専攻者が12人で合計26人である。研究対象としては少ない数であるが、参考資料として学習者の認識の傾向は、ある程度見られるのではないかと思い、調査を進めた²⁾。

教材は、5人の教員が皆、『New스타일일본어한자』を採択した³⁾。アンケートに答えた

く活動)の有益性を主張している。

2) 他のクラスについて、日本語専攻者と複数・副専攻者の割合は、1クラスに近いほど専攻者の割合が高く、筆者の担当したクラスは、専攻者と複数・副専攻者が半々の割合で集まった。

3) 2019年度後期(オフライン)までは教材の半分であるチャプター07かチャプター08までの分量を授業で

研究対象者についての詳細な内訳は以下の通りである。

<表1> 研究対象者の内訳

5クラス						6クラス					
日本語専攻		学年				日本語専攻		学年			
専攻者	複数・副専攻者	1	2	3	4	専攻者	複数・副専攻者	1	2	3	4
15	13	9	4	9	6	14	12	9	6	8	3

5クラスは完全オンデマンド型授業で行ったが、6クラスは、講義計画書上、反転授業で設定したため、事前学習はオンデマンド型で行い、教室の活動はZoomでの同時双方向型を採用し、授業を行った。以下の<表2>は、授業日程である((講義)は録画オンライン授業のことを指す)。

<表2> 授業日程⁴⁾

週	時間目	5クラス	6クラス
1週目	1時間目	O.T.	O.T、受講生カード作成
	2時間目	受講生カード作成	(講義)漢字(1-9)
	3時間目	(講義)漢字(1-9)(課題)漢字を手書き	<ZOOM>授業
2週目	1時間目	(講義)漢字(10-17)	(講義)漢字(10-18)
	2時間目	(講義)漢字(18-27)	<ZOOM>授業
	3時間目	(講義)漢字(28-35)(課題)漢字を手書き	<ZOOM>授業
3週目	1時間目	(講義)漢字(36-41)	(講義)漢字(19-31)
	2時間目	(講義)漢字(42-60)	<ZOOM>授業
	3時間目	(講義)漢字(61-68)・リアクションペーパー	<ZOOM>授業
4週目	1時間目	(講義)漢字(69-77)	(講義)漢字(32-41)
	2時間目	(講義)漢字(78-86)	<ZOOM>授業
	3時間目	リアクションペーパー、フィードバック	<ZOOM>授業
5週目	1時間目	(講義)漢字(87-94)	(講義)漢字(42-61)
	2時間目	(講義)漢字(95-102)	(講義)漢字(62-69)
	3時間目	(課題)漢字を手書き	(講義)漢字(70-77)

り扱った。見出し漢字は、チャプター07が漢字(248)、チャプター08が漢字(264)であった。

- 4) <表2>の「漢字(数字)」において、括弧の数字はテキストに見出し漢字として提示されている番付である。

6週目	1時間目	(講義)漢字(103-104)	(講義)漢字(78-86)
	2時間目	(講義)漢字(105-107)	<ZOOM>授業
	3時間目	(課題)漢字を手書き	<ZOOM>授業
7週目	1時間目	(講義)漢字(108-113)	(講義)漢字(87-96)
	2時間目	(講義)漢字(114-120)	<ZOOM>授業
	3時間目	(講義)漢字(121-123)漢字を手書き	<ZOOM>授業
8週目	1時間目	中間テスト(課題提出について説明)	(講義)漢字(97-102)
	2時間目	授業形態についての調査	中間テスト
	3時間目	(講義)漢字(124-126)	(課題提出について説明)
9週目	1時間目	(講義)漢字(127-133)	(講義)漢字(103-111)
	2時間目	(講義)漢字(134-138)	<ZOOM>授業
	3時間目	(講義)漢字(139-143)	<ZOOM>授業
10週目	1時間目	(講義)漢字(144-149)	(講義)漢字(112-120)
	2時間目	(講義)漢字(150-154)	<ZOOM>授業
	3時間目	(講義)漢字(155-159)(課題)漢字を手書き	<ZOOM>授業
11週目	1時間目	(講義)漢字(160-165)	(講義)漢字(121-127)
	2時間目	(講義)漢字(166-171)	<ZOOM>授業
	3時間目	(講義)漢字(172-176)	<ZOOM>授業
12週目	1時間目	(講義)漢字(177-180)	(講義)漢字(128-136)
	2時間目	(講義)漢字(181-185)	<ZOOM>授業
	3時間目	(講義)漢字(186-190)(課題)漢字を手書き	<ZOOM>授業
13週目	1時間目	(講義)漢字(191-196)	(講義)漢字(137-144)
	2時間目	(講義)漢字(197-201)	<ZOOM>授業
	3時間目	(講義)漢字(202-207)	<ZOOM>授業
14週目	1時間目	(講義)漢字(208-212)	(講義)漢字(145-154)
	2時間目	(講義)漢字(213-217)	<ZOOM>授業
	3時間目	(講義)漢字(218-222)	<ZOOM>授業
15週目		期末テスト	

<表2>から分かるように、5クラスは、既存のオフライン授業のように運営し、教室内で行われた、「漢字を手書きで書く」活動については、課題として出した。5クラスはオンデマンド型で25分間の録画オンライン授業であるため、オフライン授業で進んだ内容までは進めなかった。前年度は見出し漢字(248)まで進めたが、今学期の見出し漢字は漢字(222)までとなった。一方、6クラスは、反転授業であったため、1時間目はオンデマンド型で行い、2時間目と3時間目は同時双方向型で授業を行った。2・3時間目は、主に学習者の活動を中心に授

業運営をしたため、進度は教材の「チャプター05」の漢字(154)までしか行けなかった。

このように、5クラスと6クラスの授業形態と授業日程(時間目)の違いにより、学期末に学習者に調査したアンケートの項目も当然異なる。アンケートは、以下の質問内容で調査をしたが、項目ごとに、5段階の評価「非常にそうだ」「そうだ」「普通だ」「そうではない」「非常にそうではない」を設け、該当の項目にチェックしてもらった。そして、その評価を下した理由について自由記述式で聞いてもらった。

質問項目について、5クラスは、「漢字授業で取り上げられた漢字は難しかった。漢字授業の進度は速かった。この授業は漢字を理解するのに役に立った。課題が多かった。手書きで漢字を書き、提出する課題は漢字を覚えるのに役に立った。オフライン授業かZoomかで授業を受けたかった。オンライン授業はオフライン授業と比較し、どのような点が長所と短所であるのか」である。からまでは、5段階評価から選択し、その理由を書く形であり、は自由記述式である。

一方、6クラスは、「漢字授業で取り上げられた漢字は難しかった。漢字授業の進度は速かった。漢字授業の受講生のレベル差が激しかった。週末にあったことを漢字キーワードで表現する活動は漢字に馴染むことに役に立った。学習者同士の週末にあったことを聞くことは漢字の勉強に役に立った。漢字の語彙を入れて単文を作ることは漢字の勉強に役に立った。学習者が作った単文を見ることは漢字と馴染むことに役に立った。漢字を手書きで書き、提出した課題は漢字を覚えることに役に立った。非対面授業は対面授業と比較し、どのような点が長所と短所であるのか」である。からまでは選択式(理由は記述)であり、は自由記述式である。

以上のようなアンケートで学習者の認識を調査したが、5クラスと6クラスの質問項目のうち、同じ項目については、その結果を比較・分析した。また、活動(週末の出来事を漢字キーワードで書く活動と、漢字を手書きで書く活動)については、分析に必要なだと判断したため、趙(2020)の調査の結果を用い、今回の結果と比較した。

3.2 授業の様子

趙(2020)は、オフライン授業における、週末にあったことを漢字キーワードで紹介する活動の長所について述べており、手書きで漢字を書いてみる活動の有益さも述べている。

今学期は、オンライン授業であったため、活動は、同時双方向型授業がある、6クラスのみで行い(＜図1＞にその様子が見られる)の、活動は、5クラスのみ実施した。

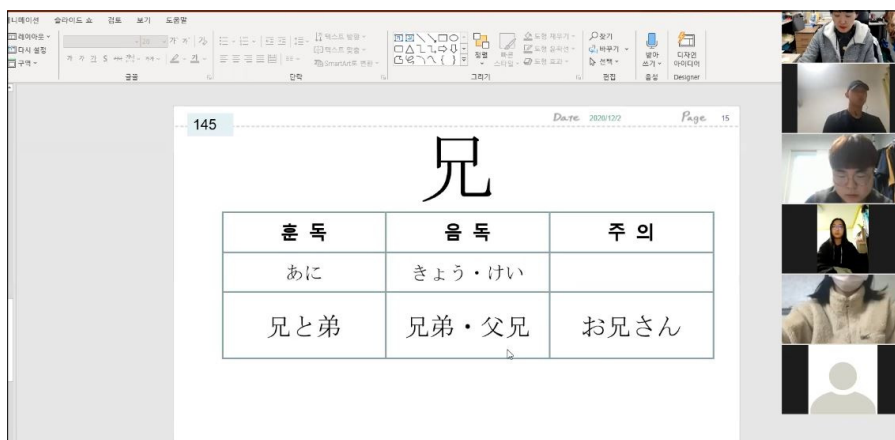
オフライン授業であった趙(2020)では、各学習者に紙を配り、そこに週末にあったことを書いてもらい、それを収集し、次回の授業でフィードバックの時間でいくつかを選別し、それを紹介する形で留意点などを説明したが、今学期は<図1>のように受講者全員の漢字キーワードが紹介でき、また、学習者一人ずつコメントもできた。



＜図1＞ 週末にあったことを漢字5つのキーワードで表現する活動

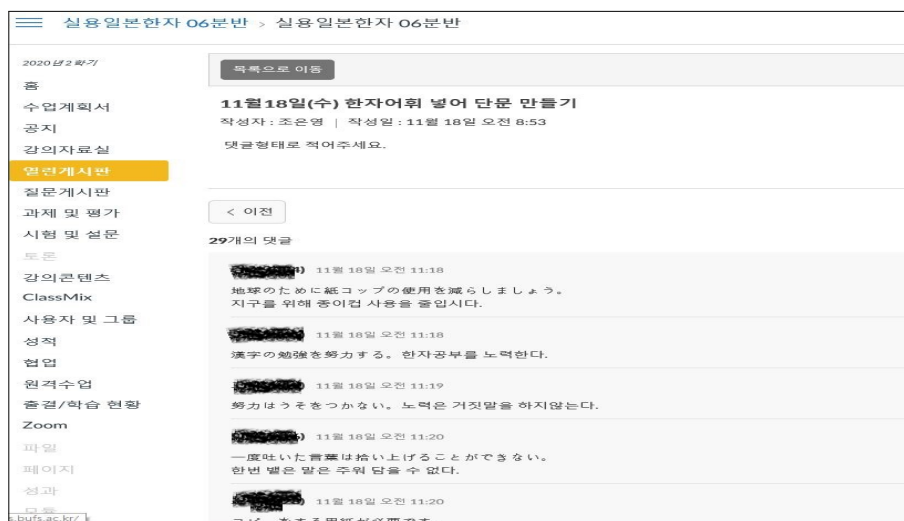
また、前学期のオフライン授業では行われておらず、今学期に行われた、6クラスの活動について説明する。6クラスは、オンデマンド型で事前に録画動画を視聴し、学習が終わった漢字について、同時双方向型授業で学習を確認した。学習者全員に<図2>6のように、学習してきた漢字の訓読みと音読みが読めるかどうかを一枚ずつスライドの語彙表を見せ、学習状況を確認した。一人の学習者に約3個~4個(スライド3~4枚のこと)の見出し漢字を見せ、語彙を読ませた。事前学習の漢字の数も少なく、漢字が繰り返して提示されるため、学習者が漢字を覚えるのにいい方法ではないかと判断し、採択した。

- 5) 対面授業では、漢字キーワードが書ける紙を配ったが、同時双方向型では釜山外大のLMSであるe-classの「열린게시판」にコメント形式でアップロードするように指示した。趙(2020)では、漢字のみ書き、ペアでお互いの週末について韓国語で話すようにしたが、今回は「열린게시판」で皆と共有することができたため、自分が書いた漢字キーワードを入れ、漢字の部分は日本語で読み、説明は韓国語でさせた。
- 6) <図2>の授業で使われたスライドの形式は、釜山外国語大学の日本語創意融合学部の韓国人教員からもらったものである。元の表は、漢字の上に振り仮名がついており、該当漢字が入った語彙が使われている2-3個の単文がある形式で書かれている(オンデマンド型で見られる動画)が、同時双方向型では振り仮名と単文を消して読ませた。



<図2> 事前に学習してきた漢字の確認方法

さらに、6クラスでは、学習者全員が漢字を読んでからは、学習した漢字の語彙を入れて単文を作る活動を行った⁷⁾。作文を作成し、<図3>のように、LMS上にアップロードすると、学習者本人は自分が書いた文を読み、全員読み終わったら、一文ずつずらして他の学習者が作った文を読むように指示した。



<図3> 該当週で習った漢字を入れて単文作成

7) 上記の<図1>と、下記の<図3>の活動は、授業中、学習者に約10分間の時間を与え、学習者が落ち着いて単文を作ることができるように心掛けた。

以下の章では、5クラスと6クラスにおける活動について、アンケートの結果を提示し、考察する。

4. 分析結果と考察

4.1 各クラスのアンケートの結果

5クラスの学習者は、授業で扱った漢字のレベルが高かったかという質問に対し、(非常に)そうではないと71.5%(20人)が答えている。の質問は授業の進み方であり、進度が速かったかという質問に対し、71.5%(20人)が進度は速くないと答えた。の質問、授業が漢字を理解するのに役に立ったかと聞いたら、(非常に)そうだと答えたのが92.8%(26人)であった。の質問、課題が多かったかという質問に対し、(非常に)そうではないという答えが82.1%(23人)であった。の質問、手書きで漢字を書く課題が漢字の覚えに役に立ったについては、(非常に)そうだと答えたのが96.4%(27人)であった。の質問、オンデマンド型授業だったが他の授業形態を受けたかったかという質問に対し、28.6%(8人)が(非常に)そうだと答えている。「普通だ」の半分の約20%を出してみると、約50%となり、学習者が望んでいる授業形態に目立った傾向はないことが分かった。

<表3> 5クラスの結果⁸⁾

	1	2	3	4	5	合計
漢字の難易度	0(0.0%)	1(3.6%)	7(25.0%)	15(53.6%)	5(17.9%)	28(100%)
授業の進度	0(0.0%)	1(3.6%)	7(25.0%)	13(46.4%)	7(25.0%)	28(100%)
漢字を理解	20(71.4%)	6(21.4%)	1(3.6%)	1(3.6%)	0(0.0%)	28(100%)
課題の量	0(0.0%)	0(0.0%)	5(17.8%)	14(50.0%)	9(32.1%)	28(100%)
漢字を覚える	18(64.3%)	9(32.1%)	1(3.6%)	0(0.0%)	0(0.0%)	28(100%)
他の授業形態	4(14.3%)	4(14.3%)	11(39.3%)	4(14.3%)	4(14.3%)	28(100%)

一方、6クラスの学習者に実施した授業に関するアンケート調査の結果をまとめると<表

8) 5段階は、1「非常にそうだ」、2「そうだ」、3「普通だ」、4「そうではない」、5「非常にそうではない」である。<表1>から<表10>までにある1から5までの数字は、5段階を指す。

4>となる。

<表4> 6クラスの結果

	1	2	3	4	5	合計
漢字の難易度	0(0.0%)	3(11.5%)	11(42.3%)	9(34.6%)	3(11.5%)	26(100%)
授業の進度	0(0.0%)	1(3.8%)	4(15.4%)	10(38.5%)	5(19.2%)	26(100%)
学習者のレベル	1(3.8%)	5(19.2%)	13(50.0%)	5(19.2%)	2(7.7%)	26(100%)
漢字キーワード	16(61.5%)	7(26.9%)	2(7.7%)	1(3.8%)	0(0.0%)	26(100%)
漢字の勉強	10(38.5%)	12(46.2%)	2(7.7%)	0(0.0%)	2(7.7%)	26(100%)
単文作成	16(61.5%)	8(30.7%)	1(3.8%)	1(3.8%)	0(0.0%)	26(100%)
漢字の勉強	14(53.8%)	10(38.5%)	1(3.8%)	0(0.0%)	1(3.8%)	26(100%)

<表4>の見方であるが、 から3までは、授業運営についてであり、からは、同時双方向型のZoomでの活動に対する学習者の認識である。<表4>より、6クラスの学習者は、の質問、授業で扱った漢字のレベルが高かったかという質問に対し、(非常に)そうではないと46.1%(11人)が答えている。の質問、授業の進み方で、進度が速かったかどうかを質問したところ、57.7%(15人)が進度は速くないと答えた。の質問は、5クラスにはない質問であるが、同時双方向型の授業では学習者同士がお互いのレベルを感じると思い、学習者にレベルの差を感じたかどうかを質問した。レベルの差を感じたと答えた学習者は23.0%(6人)、感じなかったと答えた学習者は26.9%(7人)、普通が50%(13人)である。普通だと答えた学習者を半々にすれば、レベルの差を感じた学習者は半分の学習者であることが分かる。

は、上記の<図1>のように週末の出来事を漢字キーワードで表現し、それを発表する活動についての学習者の認識である。この活動は漢字に馴染むために役に立ったかどうかを質問したところ、88.4%(23人)が(非常に)そうだと答えており、また、の学習者同士のキーワードを聞く(見る)ことが漢字の学習に役に立ったかについては、84.7%(22人)が(非常に)そうだと答えている。は、該当する漢字を入れて単文を作る活動が漢字の学習に役に立ったかどうかを質問したが、(非常に)そうだと答えた学習者が92.2%(24人)であり、また、は他の学習者が作った単文を共有することが漢字の学習に役に立ったかどうかを質問したところ、92.2%(24人)が(非常に)そうだと答えている。

4.2 結果の比較・検討

漢字学習は日本語学習者を悩ませる項目である。漢字を目に馴染ませ、漢字について身近に感じるようにするには、どうすればいいのかは、漢字の授業を担当している教員の課題のような気がする。ここからは、オフライン授業で行われた活動(趙：2020)の結果と、今回の授業形態による学習者の認識の結果を比較してみる。

まず、授業で取り上げた漢字の難易度(レベル)について、趙(2020)のオフライン授業の結果と比較すると、以下の<表5>のようになる。

<表5> 漢字の難易度は高かった

	1	2	3	4	5	合計
オフライン授業(趙2020)	1(1.4%)	12(16.9%)	項目なし	46(64.8%)	12(16.9%)	71(100.0%)
オンデマンド型授業(5)	0(0.0%)	1(3.6%)	7(25.0%)	15(53.6%)	5(17.9%)	28(100%)
併用型授業(6)	0(0.0%)	3(11.5%)	11(42.3%)	9(34.6%)	3(11.5%)	26(100%)

オフライン授業において、授業で取り上げられた漢字のレベルが難しくないと答えた学習者は、81.7%(58人)であった。今回の調査では、オンデマンド型で漢字を学習した5クラスの学習者に、漢字のレベルは難しかったかという質問に対し、(非常に)そうではないと答えた学習者が71.5%(20人)であった。一方、併用型で漢字を学習した6クラスの学習者は、46.1%(11人)が難しくないと答えている。もし、「普通だ」と答えた5クラスの25.0%(7人)と6クラスの42.3%(11人)の割合を半分に分けて計算すると、それぞれ、5クラスは71.5%から84%となり、6クラスは46.1%から68.3%となる。

この結果から、オフライン授業とオンデマンド型で漢字を学習している学習者は、漢字の難易度については、似ている認識を持っていることが分かる。一方、併用型の学習者はやや低く、68.3%の学習者が漢字の難易度が高くないと答えている。

趙(2020)と、今回の5クラスのオンデマンド型で取り扱われている漢字の数は、併用型授業で取り扱われている漢字の数より多い。このことから、漢字の数の多少は漢字の難易度を判断する尺度とはあまり関係ないことが分かった⁹⁾。

9) <表2>から5クラスは222個の漢字を習い、6クラスは154個の漢字をならっている。

<表6> 授業の進み方が速かった

	1	2	3	4	5	合計
オフライン授業(趙2020)	3(4.2%)	18(25.4%)	項目なし	45(63.4%)	5(7.0%)	71(100.0%)
オンデマンド型授業(5)	0(0.0%)	1(3.6%)	7(25.0%)	13(46.4%)	7(25.0%)	28(100%)
併用型授業(6)	0(0.0%)	1(3.8%)	4(15.4%)	10(38.5%)	5(19.2%)	26(100%)

趙(2020)では、授業の進み方について、70.4%が速くないと答えている。今回の調査では、オンデマンド型の学習者は、71.4%が速くないと答えており、一方、併用型の学習者は、57.7%が速くないと答えている。

この結果から、授業の進み方についての学習者の認識は、オフライン授業とオンデマンド型授業が併用型より速くないと思っていることが分かった。

オンデマンド型の授業を受けている学習者は、(下記で述べるが)オンデマンド型の長所である、自分で授業の動画のスピードが調整でき、繰り返し学習ができる点から、授業が速くないと答えたのではないかと思われる。

以上、授業運営の面からの学習者の認識を確認したが、以下は、併用型で活動したことについての学習者の認識を、趙(2020)の活動の結果と比較して考察する。活動 についての趙(2020)の結果と今回のアンケートの結果を表にまとめると、下記の<表7>のようになる。

<表7> 週末の出来事を漢字キーワードで表現する活動

	1	2	3	4	5	合計
オフライン授業(趙2020)	19(26.8%)	41(57.7%)	項目なし	9(12.7%)	2(2.8%)	71(100.0%)
併用型授業(6)	16(61.5%)	7(26.9%)	2(7.7%)	1(3.8%)	0(0.0%)	26(100%)

週末の出来事を漢字で表現する活動の目的は、漢字に馴染むためと、繰り返し現れる漢字を覚えるため、学習者同士の漢字から新しい漢字を認識、覚えることである。<表7>から、オフライン授業の趙(2020)では、学習者の84.5%が週末について漢字キーワードで表現する活動は、漢字学習に役に立ったと答えている。今回の6クラスの調査では、88.4%が週末のことをキーワードで書き、LMS上にアップロードし、それを読む活動について、学習者は漢字学習に役に立ったと思っている。

この結果から、週末の出来事について漢字をキーワードで表現する活動は、授業形態と

あまり関連がない有益な活動であることが分かった。

次に、今回の6クラスの授業では、週末の出来事をLMS上にアップロードすることで、その漢字キーワードについて学習者は共有し、他の学習者の漢字キーワードを見ることができた。それについて、漢字学習に役に立ったかを聞いたところ、学習者の88%が漢字の勉強に役に立ったと答えた。週末にあったことを漢字キーワードで表す活動は、効果のある漢字学習の一つであることが今回のオンライン授業でも確認できた。

<表8> 学習者同士の漢字キーワードを聞くことが役に立った

	1	2	3	4	5	合計
併用型授業(6)	10(38.5%)	12(46.2%)	2(7.7%)	0(0.0%)	2(7.7%)	26(100%)

また、5クラスの手書きで漢字を書く課題が漢字を覚えるのに役に立ったかという質問に対し、趙(2020)と今回の調査の結果は以下の<表9>のようになる。

<表9> 学習した漢字を手書きで書く活動が漢字を覚えるのに役に立った

	1	2	3	4	4	合計
オフライン授業(趙2020)	37(52.1%)	33(46.5%)	項目なし	0(0.0%)	1(1.4%)	71(100.0%)
オンデマンド型授業(5)	18(64.3%)	9(32.1%)	1(3.6%)	0(0.0%)	0(0.0%)	28(100%)

趙(2020)では、オフライン授業中に行われた活動であったが、今回では、課題として出したため、ツールが異なるものの、手書きで漢字を書くことの有益さは確認できた。<表9>より、趙(2020)では、98.6%が役に立つと答えているが、今回の調査では、98.1%が漢字を書く課題が漢字を覚えるのに役に立ったと答えており、その割合も非常に似ている。

この結果から、手で漢字を書くことは、漢字を覚えるのに役に立ち、授業形態にあまり影響されない漢字の学習方法であることが分かった。

<表10> 2020年度後期：同時双方向型漢字を入れて単文を作る行為

	1	2	3	4	5	合計
単文作成が役に立った	16(61.5%)	8(30.7%)	1(3.8%)	1(3.8%)	0(0.0%)	26(100%)
他の単文が役に立った	14(53.8%)	10(38.5%)	1(3.8%)	0(0.0%)	1(3.8%)	26(100%)

＜表10＞から、漢字の語彙を入れた単文を作ることは、漢字を覚えるのに(非常に)役に立ったと答えた学習者が92.2%(24人)であり、他の学習者が作った単文を見ることは、92.3%(24人)である。

このことから、併用型(同時双方向型)での活動(漢字を入れて単文を作り、また、作られた単文を読むこと)は、学習者の漢字習得に役に立ち、漢字学習に肯定的に作用することが分かった。

4.3 授業形態ごとのメリットとデメリット

この節では、5クラスの28人と6クラスの26人の学習者に、自分が受講している授業について、自由記述式で書いてもらった内容を検討する。5クラスの学習者に「オンデマンド型授業のメリットとデメリット」は何かと質問し、自由記述式で書いてもらった。学習者は、オフライン授業と比べ、オンデマンド型授業について、以下のように、メリットとデメリットを述べている¹⁰⁾。

＜表11＞ オンデマンド型授業について

メリット	デメリット
時間・場所に自由	質問しにくい
反復視聴可能	集中力の低下
落ち着ける	授業で扱う漢字の数の少なさ
コロナ感染の恐れが減少	後回しにしたり、怠ける
楽に受けられる	対面授業より学習の質が低い
時間の余裕ができ、自習が可能	学習に対する熱意と態度が低下
移動時間と費用の節約	学習者と先生に会えない
学習時間に余裕	一方的な疎通
	先生とのコミュニケーションの不在

＜表11＞より、オンデマンド型授業の特徴がはっきり見られ、これらの項目を上位概念でまとめると、メリットとしての 時間・場所に自由 では、時間の面を学習者が考えていることが分かり、 反復視聴可能 では、学習の再現を考えており、 落ち着ける では、オンデマンド型授業によりコロナ

10) 自由記述式の内容を大きくカテゴリ化し、表にまとめた。

禍で落ち着いたことが分かる。つまり、メリットは、「時間に自由」「反復学習可」「安心感」と表現することができよう。

一方、オンデマンド型授業のデメリットとして、¹⁰⁾では、学習に集中することが難しいこと、¹¹⁾では、授業の質について否定的に考えていること、¹²⁾では、教員に質問できず、一方的な疎通の授業で、質問するのが難しいこと、¹³⁾では学習者に会えないことを挙げている。つまり、デメリットは、「集中力の低下」「授業の質の問題」「コミュニケーションの不在」と言えよう。

次は、併用型授業をした6クラスの学習者の結果は以下の<表12>である。

<表12> 併用型授業について

メリット	デメリット
時間自由	積極的な参加に限界
登校しなくてもいい	設備のアクシデント
疲れない	インターネットのつながりの問題
対面より発表が負担にならない	集中力の低下
時刻の心配がない	漢字の書き順が覚えなかった
対面なら恥ずかしいことが減少	集中度・積極性・興味の低下
馴れている家で授業が受けられる	先生とのコミュニケーションの不在

併用型授業を受けた学習者が考えている授業形態のメリットについて、¹⁴⁾では、オンデマンド型にも出ていたメリットである、時間に自由である点を挙げており、¹⁵⁾では学校に登校しなくてもいいことを挙げている。¹⁶⁾では、同時双方向型授業のメリットと言えるが、オフライン授業での発言や発表より、恥ずかしさを感じないということを挙げている。つまり、併用型のメリットは、「時間に自由」「不登校の便利さ」「発表時の大胆さ」と言えよう。

一方、併用型授業のデメリットについて、オンデマンド型授業では出ていなかった、¹⁷⁾のように、インターネット環境や装備、オンライン授業のためのインフラの不備などを挙げており、¹⁸⁾のように、漢字を書く時間や書き順が分からないことをデメリットとして挙げていた¹⁹⁾。²⁰⁾は、オンデマンド型授業でも出ていたデメリットである。つま

11) 漢字の書き順が今のICT時代に必要であるかという疑問を持っている方も多い。漢字を正しく入力する能力も大事であるが、問題解決力の育成により力を入れるべきだと思われる。漢字の書き順についての考察は今後の課題にしたい。

り、「インターネット環境の問題」「集中力・積極性・興味の低下」「先生とのコミュニケーションの不在」である。

これらのデメリットについて、インターネット環境というインフラを構築すること以外は、その改善策として、集中力の向上のためには、授業動画の間にいくつかのクイズを不規則的に出したりすることが考えられる。また、学習者の授業に対する興味を引き出すための一つの方法として、教師は学習者ごとに課題を課すことである。事前に確認しておいた学習者の趣味や興味を用い、課題を達成するように指導する。さらに、先生とのコミュニケーションが活発にできるように、LMS上のメッセージを利用したり、SNSを利用したりする。

以上、オンライン授業における漢字授業の実践を報告し、学習者からとったアンケート調査の結果から、オンデマンド型授業と併用型授業のメリットとデメリット、デメリットの改善策を述べた。

今後、漢字教育の方向性について、オフライン授業とオンライン授業の形式を念頭に置き、授業目的を果たすための最も適する方式を選ぶ必要があると思われる。つまり、ポストコロナ時代を語る際、オフライン授業がメインだった教育現場でも、オンライン授業を積極的に導入し、学習者のニーズにあった授業形式を選ばなければならないと思われる。

5. まとめ

本研究では、オンライン授業を余儀なくされた環境の中、釜山外国語大学の日本語創意融合学部1年生の授業、「実用日本漢字」2クラスについて、一つはオンデマンド型授業で漢字授業を実施し、もう一方は、反転授業であったため、事前学習はオンデマンド型授業で、教室活動は同時双方向型授業で行い、学習者にアンケートの結果を分析・考察したものである。本研究で明らかになったことは以下の通りである。

- (1) 授業で取り扱われた漢字の難易度について、オフライン授業とオンデマンド型授業を受けた学習者より、併用型授業を受けた学習者の方が難しさを感じる。
- (2) 授業の進み方について、オフライン授業の方がオンライン授業より速く感じる。その理由として考えられるのは、オンライン授業の場合、難しい漢字を繰り返して学習することができるためである。

- (3) 同時双方向型授業における週末にあった出来事を漢字キーワードで表す活動は、オンライン・オフラインという授業形態とは関係なく、漢字学習に役に立ち、他の学習者が書いた漢字キーワードを見ることも漢字学習に役に立つ。
- (4) 同時双方向型授業における漢字を入れて単文を作る活動について、漢字学習に役に立ち、他の学習者が作った単文を見ることも漢字学習に役に立つ。
- (5) オンデマンド型授業を受けた学習者が考える、オンデマンド型授業のメリットは「時間に自由」「反復学習可能」「安心感」であり、デメリットは「集中力の低下」「授業の質の問題」「教師と学習者同士のコミュニケーションの不在」である。
- (6) 併用型授業を受けた学習者が考える、併用型授業のメリットは「時間に自由」「不登校の便利さ」「発表時の大胆さ」であり、デメリットは「インターネット環境の問題」「集中力・積極性・興味の低下」「教師とのコミュニケーションの不在」である。

本研究は、調査対象者の少なさ、考察の薄さなどいくつかの問題を持っている。今後、研究対象者を増やし、調査を行い、考察も深めたい。今回は紙面上の問題により、アンケートの質問項目において、5段階評価を選択した理由について、考察できなかった。この点についても今後の課題にしたい。

本研究の意義は、オンライン授業間の比較の研究が多くなされる中、同一科目において、オフライン授業とオンライン授業の比較、また、オンデマンド型授業と併用型授業を比較したことにあるのではないと思われる。最後に、杉本(2020:71)が述べているように、本研究も「2020年の試行錯誤の一例を記録として残すこと」を希望している。

【参考文献】

- 岩井朝乃・峯崎知子(2020)「教師は韓国の大学における教養日本語科目のオンライン化をどのように経験したか - 教師による内省と学習者の満足度を中心に -」『韓国日語教育學會・言語文化教育研究学会(日本)共同開催 2020年度 國際學術大會(第37・38回)要旨文』韓国日語教育学会、pp.87-90
- 河野奈津子(2020)「ZOOMを用いた日本語会話授業の実践」『大韓日語日文學會2020年秋季國際學術大會』、pp.30-33
- 澤田信恵(2020)「非対面による日本語会話授業の実践と課題」『韓国日語教育學會・言語文化教育研究学会(日本)共同開催 2020年度 國際學術大會(第37・38回)要旨文』韓国日語教育学会、pp.79-82
- 杉本加代子(2020)「学習者の提出課題を活用したオンデマンド型オンライン授業」『2020년도 일본어문학회 추계국제학술대회』、pp.71-77
- 朴京愛(2020)「비대면 수업으로 행한 대학 일본어 교양수업 실천보고 - 학습흥미와 학습효과를 올리기 위한 시도 -」『韓国日語教育學會・言語文化教育研究学会(日本)共同開催 2020年度 國際學術大會

(第37・38回)要旨文』韓国日語教育学会, pp.91-96

白以然(2020)「온라인 수업에 대한 대학생의 인식 조사 - 교양일본어수업을 대상으로」『日本語教育研究』52, pp.59-74

趙恩英(2020)「釜山市所在のB大学の日本漢字授業の運営について-専攻選択教科目の「実用日本語漢字」を事例として-」『日本語教育』第92輯, pp.49-63

寺田庸平・尹鎬淑(2020)「韓国の大学におけるオンライン日本語教育に関する考察-同期型と非同期型の初級事業実践を中心に-」『韓国日語日文学会2020年秋季国際学術大会論文集』, pp.70-76

논문투고일 : 2020년 12월 31일

심사개시일 : 2021년 01월 17일

1차 수정일 : 2021년 02월 03일

2차 수정일 : 2021년 02월 14일

게재확정일 : 2021년 02월 17일

 <要旨>

オンライン授業における漢字授業の実践

- 釜山外国語大学の「実用日本漢字」授業を事例に -

趙恩英

本研究では、釜山外国語大学の1年生の授業、「実用日本漢字」2クラスについて、一つはオンデマンド型授業、もう一方は、併用型授業(オンデマンド型と同時双方向型)を一緒に行った学習者にアンケートを実施し、その結果を分析・考察したものである。本調査で明らかになったことは以下の通りである。

(1) 漢字の難易度は、対面型授業とオンデマンド型授業を受けた学習者より、併用型授業を受けた学習者が難しさを感じる。(2) 授業の進み方は、対面型授業が非対面型授業より速く感じる。(3) 週末にあった出来事を漢字キーワードで表す活動と、他の学習者が書いた漢字キーワードを見るは漢字学習に役に立つ。(4) 漢字を入れて単文を作る活動と、他の学習者が作った単文を見ることは漢字学習に役に立つ。(5) オンデマンド型授業を受けた学習者が考える、メリットは「時間に自由」「反復学習可能」「安心感」である。(6) オンデマンド型授業を受けた学習者が考える、デメリットは「集中力の低下」「授業の質の問題」「教師と学習者同士のコミュニケーションの不在」である。(7) 併用型を受けた学習者が考える、メリットは「時間に自由」「不登校の楽しさ」「発表時の大胆さ」である。(8) 併用型を受けた学習者が考える、デメリットは「インターネット環境の問題」「集中力・積極性・興味の低下」「教師とコミュニケーションの不在」である。

Practice of Japanese Kanji learning class conducted by online class

Cho, Eun-Young

This study conducted the survey and analyzed to learners who received on-demand class and combined type class (on-demand and concurrent interactive type) among 2 classes of 'Japanese Kanji learning' a freshmen class at a four year university. We found the following results.

(1) In terms of difficulty in Kanji learning, the learners who received the combined type class experienced the difficulty rather than the learner who received on-demand type class and face-to-face type class. (2) In terms of progress of class, the learners of face-to-face type class felt it faster rather than the learners of online class. (3) The activity of expressing the things experienced in the weekend into Kanji key words and looking at other's Kanji learning key words is helpful in learning Kanji. (4) Making a short sentence using Kanji and looking at a short sentence made by other learner is helpful in learning Kanji. (5) The strength of on-demand type class that learners think is [Free time], [repeat learning is possible] and [sense of security]. (6) The weak point of on-demand type class that learners think is [Poor concentration], [Quality of Class] and [Absence of Communication Between Teachers and Learners] (7) The strength of combined type class that learners think is [Free time], [Comfort of not attending the school] and [boldness of presentation] (8) The weak point of combined type class that learners think is [Problems of the Internet Environment], [Decreased concentration, positivity, and Interest] and [absence of communication with teachers].